Osaka University Knowledge Archive

Title	『宝物集』栴檀像震旦将来譚考
Author(s)	中川, 真弓
Citation	語文. 2004, 82, p. 13-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69036
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『宝物集』栴檀像震旦将来譚考

中川　真弓

はじめに

嵯峨清涼寺の本尊釈迦如来像は、「三国伝来」の栴檀像として知られる仏像である(1)。中世初期成立の『宝物集』に見える釈迦栴檀像譚は、この像の縁起を天竺から説き始め、西域・震旦を経て本朝へと将来されるまでの経緯を記す。そして、清涼寺の本尊が、釈迦の姿を模写した栴檀像そのものであるとする文脈が導き出されている。『宝物集』の眼目はその点にこそあった。

この天竺から本朝までの栴檀像譚は、別々の典拠をもつ各部から成り立っている(2)。本稿では、『宝物集』の栴檀像譚において、これまであまり取り上げられることのなかった西域・震旦将来部に特に注目する。『宝物集』の記事の整理のあり方を考察することによって、『宝物集』が典拠としたであろう栴檀像譚の原型についても言及したい。

なお、本稿は、以前に清涼寺釈迦像譚について論じた拙稿(「清涼寺の噂―『宝物集』釈迦栴檀像譚を起点として―」『説話文学研究』三八、二〇〇三年六月)と相補するものである。

一　『宝物集』栴檀像譚の震旦将来部について

『宝物集』は、物語の中心となる舞台を清涼寺釈迦堂に設定し、冒頭部で語り手の男を向かわせる。そして、主人公が釈迦堂に到着すると、本尊釈迦如来像の縁起を「寺僧」の口から語らせる。

縁起は、仏典に見える天竺での釈迦の忉利天説話、および優塡王の栴檀像造立説話から始まり、続いて栴檀像が天竺から震旦へと移動する話に展開する。以下、この震旦将来部の記述を検討したい。

「…天竺にておほくの人を利益し給ふ程に、弗舎密多と云悪王生て、国中の仏菩薩をほろぼしける時、一人の大臣出家遁世して、かばかりめでたくおはします仏を失ひ奉らむ事を悲しみて、東天竺の東に亀慈国と云国へぞ渡し奉りける。その

程昼仏をおひ奉り、夜は仏におはれ奉るにぞ侍めり。鳩摩羅琰といふは、此大臣の事也」。

①弗舎密多王と鳩摩羅琰と同時の人にあらず。しかりといへ共伝記に注之(3)。

右の部分では、天竺で「弗舎密多」という悪王が仏法を滅ぼそうとした時、一人の大臣すなわち鳩摩羅琰が出家して、栴檀像を守るために亀茲国へと運んだという話が語られる。但し、傍線部①の注記にも示されているように、「弗舎密多」は時代的に合わない。

次に、西域から震旦へと渡される過程が述べられる。

「亀慈国の蒙遜王あながちに悦て、供養恭敬し給ひける程に、唐の白純王此事を聞て、兵を遣して奪とりて、あがめ行ひ給ひけるを、…

ここでは、亀茲国の「蒙遜王」のもとにあった栴檀像を、唐の「白純王」が兵を遣わして奪い取ったとある。この後の省略部分では、渡来した東大寺僧奝然によって栴檀像が震旦から本朝へと渡された事情が語られる。

以上の栴檀像譚を受けて、『宝物集』の語り手の男は、「さては二伝の仏にこそおはしますなれ」と感想を述べる。天竺から西域亀茲国、震旦、日本へと舞台を移しながら東漸していく経緯を語ることにより、清涼寺の釈迦像が、天竺において在世中の釈迦の姿を写して造られた栴檀像そのものであるという主張がなされているのである。

次に続く記事は、その栴檀譚に対する注釈である(4)。最初の一文は、「二伝の仏」について補足したものとなっている。

奝然が帰朝して宇治殿〈頼通〉に参らせたる解文には、「優塡王、赤栴檀を以て移し奉る釈迦の像を、たがへず移し奉る釈迦一体」とこそ侍めれ。

右に掲げた引用文は第二種七巻本系吉川本の本文であるが、文中に二箇所ある「移し」という語は、「移動」あるいは「模写」のどちらを示しているか誤解を生じやすい。この本文が象徴的に示すように、『宝物集』の伝本間ではこの部分に大きな異同があり、「二伝の仏」という語が導き出される直前の文脈に対して立場を異にする。吉川本の場合、「解文」の内容は「奝然が将来した像は、栴檀像を模刻した像である」となっており、直前の文と相反する記事となっている。しかし、直後に栴檀像譚への校勘記事が列挙されることから、この「解文」の部分もまたその一部と考えるべきである。つまり、右の記事は直前の文章と異なる内容であるのが正しく、本来の『宝物集』は吉川本のような本文を持っていたと考えられる。以下、校勘記事は次のように述べられる。

②又、白純王の名も不審なきにあらず。符堅と云王、呂光と云将軍を遣して取たり、とみゆるものも侍るめり。③又、張騫等の八十人の兵を遣したりとみゆる文も侍るめる。④又、鳩摩羅琰は如来滅後九百年の人也。弗舎王は上代の帝也。

伝記に、大江正衡が、河原の院にて、

昔忉利天安居九十日　刻二赤栴檀一而模二尊容一
今抜提河滅度二千年　治二紫磨金一而礼二両足一

と書も、此御仏のことぞかし、と思ひ出られて哀なり。内記上人のほめけるも、理にぞ侍る。

栴檀像譚に見られる人名には史実と異なるものがあるが(5)、傍線を施した②③④は、その栴檀像譚本文に対する注釈である。本文では鳩摩羅琰を迎えた亀茲国王を「蒙遜王」とするが、史実は「白純王」が正しい。「蒙遜王」は匈奴系北涼の沮渠蒙遜。彼は仏教に関心を寄せ、曇無讖を国に迎えたことでも知られる人物であった。さらに、亀茲国から震旦へと栴檀像が運ばれたのは、前秦の苻堅が呂光を将軍として亀茲国を伐たせたことが契機となっている。傍線②はそうした内容を記す文の存在を示しており、傍線③は、さらに別の異説の存在を示している。また、傍線④は、先の傍線①と同じく、「弗舎密多」と鳩摩羅琰が時代を異にする点を指摘したものである。

このように、校勘記事に列挙されている注釈が、栴檀像の震旦将来部分に集中するということは興味深い。こうした注釈が存在すること自体、震旦将来譚には様々な説があったことを示している。『宝物集』は、それらの諸説をどのように受容したのであろうか。次節以降では、諸文献に見られる栴檀像譚の文脈のうち、特に震旦将来の部分に着目することによって、それらと比較した『宝物集』の栴檀像譚にどのような特徴が見出せるのか、考察を加えることとする。

二　震旦将来をめぐる二つの説

『宝物集』釈迦栴檀像譚の源泉、そして日本における栴檀像譚について考察する際に、最初に参照すべき資料が『優塡王所造栴檀釈迦瑞像歴記(5)』（以下、『瑞像歴記』）である。この書は、奝然の入宋に同行した弟子の盛算によって書写され、本朝にもたらされた。『瑞像歴記』には、天竺における栴檀像の造立をめぐって数多くの説が仏典から引用されており、この像が幾度もの戦乱に巻き込まれながら震旦に移入された経緯、その後も各地を転々とした流伝のさまが記されている。さらに、もともとの『瑞像歴記』の奥書以降に、奝然が入宋して瑞像を模刻し、本朝に将来するまでの経緯が述べられている。後世、清涼寺釈迦像譚が展開していく上で、『瑞像歴記』が及ぼした影響は非常に大きいものであった。

『瑞像歴記』は、まず天竺における造像に関して、各経典から諸説を引用する。そして、次に栴檀像の震旦将来譚が続くのであるが、ここでは以下のように二つの説が並記されている。

a後有梵志鳩摩羅琰、漢言童寿、持此瑞像東之振旦、行至亀茲国、々主白純留住此像、於内供養、西蕃廿余国化之、无不帰敬、時白純王見羅琰聡明秀異、乃以長公主強而妻之、遂有羅什、々々未生而琰卒、…什道震西域、声被東国、爰後秦主符堅、…即遣驍騎大将軍呂光、将兵十万往伐亀茲、以取瑞像及羅什克之、…晋安帝義熙十一年（415）乙卯歳、有大丞相宗

公劉裕、挙兵北伐、破西長安、擒秦主姚泓、得此瑞像、…所貴者得此聖像、真国之宝也、乃置於「龍光寺」、…爰晋安帝義熙七年（411）辛亥歳、羅什卒、…

b…爰梁祖武帝時、天監元年（502）正月八日、夢栴檀像入国、因発詔募人、欲往迎其像、即聞昔優塡王所造像在祇洹寺、遣決勝将軍郝騫・謝文華等八十人、応往達具状、祈請舎衛王、此中天正像不可縁辺、乃令工匠更刻紫檀、人図一相、卯時運手、至午便就、相好具足、而像頂放光、降微細雨、并有異香、騫等負此像、行数万里、備歴艱難、…後梁大定八年（562）、於城北造大明寺、以像置之、至唐咸亨五年（674）、朝散郎狄仁瓘使還、至荊府大明寺、親礼此像者、漢土雖有二瑞像、騫負来是非優塡所造真像乎、

引用aの部分では、栴檀像が、鳩摩羅琰によって亀茲国へ運ばれたこと、前秦苻堅の将軍呂光により鳩摩羅琰の子である鳩摩羅什とともに奪取されたこと、やがて「龍光寺」へ安置されることになった経緯などが述べられている。

一方、引用bの部分では、梁祖武帝が優塡王所造釈迦像を求めて決勝将軍郝騫および謝文華ら八十人を遣わした話が載せられている。先行研究でも指摘されているように(7)、先に見た『宝物集』の校勘記事の傍線③に「又、張騫等の八十人の兵を遣したりとみゆる文も侍るめる」とあったのは、この説の「郝騫」の名を、前漢の武帝が大月氏国へ派遣した「張騫」と誤ったものである。郝騫たちは、釈迦像そのものを持ち去ることを舎衛国王に許可されなかったので、栴檀像を〈模刻〉して持ち帰り、その像はやがて「大明寺」へ安置されることとなった。

但し、この話は末尾に「漢土雖レ有二瑞像一、騫負来是非二優塡所造真像一乎（漢土に二瑞像ありといへども、騫の負ひて来たるは是れ優塡所造の真像にあらざるか）」とあり、bの像が栴檀像だということは否定されている。『瑞像歴記』において、この説があくまでも異説として扱われている点は注意する必要があろう。

そして、『瑞像歴記』は再びaの説に戻り、龍光寺の像が「開元寺」へ移された過程を述べる。

隋開皇九年（589）己酉歳、隋文帝遣晋王広、伐陳滅之、便督于広陵、時有望気者、奏江南猶有異気、悉相訊問、時有沙門智脱言、此必是「龍光寺」瑞像也、於是為首、請迎長楽道場、場帝改寺為道場、即今開元寺也、…

…爰大師（＝裔然）有移造此像之心、欲奉造之間、其像以安置内裏西、華門外新造啓聖禅院、々是今上官家捨一百万貫銭所造也、於是招雇雕仏博士張栄、参彼院、奉礼見移造、彼朝雍熙三年（987）載台州客鄭仁徳船、奉迎請像耳、本朝永延元年云々

このように「開元寺」の説を正統とする立場は、『瑞像歴記』の作者十明が開元寺の僧であったことにもよるだろう。裔然が将来した像は、この開元寺ゆかりの栴檀像を模刻したものであったため、鳩摩羅琰が登場する伝承が、清涼寺釈迦像の由来として採用されることになったのである。なお、『瑞像歴記』に合括され

た「栴檀釈迦文像略讃」は、次に掲げるように『瑞像歴記』の内容を概略化したものとなっているが、ここでも震旦将来に関しては先に見たaの説が採用されている。

夫栴檀像者即釈迦牟尼仏真容也、昔優塡王時、仏在忉利宮為母摩耶説法、…仏即与像摩頂授記、汝後令流于東土、即今震旦国也、後至七月十六日、自忉利天降于中天、優塡王与像同迎而獲其瞻礼焉、後鳩摩羅琰法師背負其像来自中天、昼則僧負像、夜乃像負僧、…而有遺躰子、即鳩摩羅什也、後秦主符堅拝呂光為将軍、討獲西戎、破亀茲国、奪像并師羅什同帰東土、後至隋煬帝駕幸楊州、遷至于開元寺、建閣供養、…

鳩摩羅琰が栴檀像を亀茲国へと運ぶ際に「昼則僧負レ像、夜乃像負レ僧（昼はすなはち僧、像に負はれ、夜はすなはち像、僧に負はる）」とある。この表現は『瑞像歴記』本文には見られないが、後世に仏像運搬の表現の類型となったもので、『宝物集』にもそれが受け継がれている。『宝物集』の栴檀像譚震旦将来部は、人名に誤伝を含みながらも、鳩摩羅琰が運んだとする説を採用しているのである。

三　『転法輪鈔』所収、澄憲作の表白に見える栴檀像譚

次に、『宝物集』とほぼ同時代の言説と考えられる資料で、清涼寺釈迦如来像に対する言及が見られる、『転法輪鈔』に所収された澄憲作の表白について検討する。この表白の内容を考察し、先に見た『宝物集』の記述と比較してみたい。

建久二年（一一九一）八月、清涼寺で法華八講が催された。八講の初座における表白の冒頭には、後白河院（一一二七―九二）が清涼寺へ臨幸し、釈迦像を瞻仰した旨が示されている。「帝王」の清涼寺への参籠は、これが初めてであった。また、同八講の結願表白では、釈迦像の由来が『瑞像歴記』を典拠として述べられている。

…此尊像、国王御帰依機感尤相応。初優塡大王恋如来、模赤栴檀像。波斯匿大王同恋暮、瑩紫磨金像。是即五天竺之中如来像始也。…在世猶有此希有事。故反滅後、霊遍西天、名聞東漢。

b'遂使梁武帝、天鑑元年正月八日、夢檀像入吾国。彼漢明帝、夢金人道教初伝。梁武帝、夢檀像尊容遂至。帝遙伝聞檀像霊異、遣使迎請西天舎衛国王、感其深志、模像送東漢、此像、又放光、来唐室、奉請像、使郝騫等、異背帰来。…遂、至天竺十五年四月五日、使達于揚都、武皇帝率百僚跣行向四十里路、迎還大極殿、設斎度人、以湘東王即位、従揚都迎至荊都、安承光殿供養之、造大明寺安置之。

a'一説、晋安帝義熙十一年、宋公得此聖像、称真之国宝、置龍光寺。次、随文帝、望異気、迎此像、迎長楽道場、即今開元寺也。…天竺・辰旦帝皇帰依如此。

爰、本願東大寺沙門法橋奮然、天元六年八月一日、就商客船、解纜、渡唐土、幸得順風、同月十八日、着台州之浦、就揚州開元寺、尋栴檀瑞像、忽不得礼、遂入覲帝皇、就滋福

殿、雇工模像了。悦願満欲帰朝。…

（『転法輪鈔』「嵯峨清涼寺法華八講結願表白」）（8）

右の『転法輪鈔』所収結願表白（以下、『転法輪鈔』）では、天竺における優塡王の造像譚と、忉利天から帰還した釈迦を栴檀像が出迎えた話を載せ、続けて栴檀像が震旦に将来された話へと展開する。ここで注目されるのが、『転法輪鈔』が、引用部分b'に見えるように、梁祖武帝が郝騫を舎衛国へ派遣した話を載せていることである。さらに郝騫が将来した像が後に「大明寺」に安置された事情も語られているが、前節で指摘した通り、この話は『瑞像歴記』では異説として扱われていたものであった。

そして、『転法輪鈔』は、「一説」として「龍光寺」に安置されることになった像のことを記す。以下には、この像が「開元寺」へと安置されるまでが記されている。しかし、この説における天竺から震旦までの将来の経緯については全く述べられていない。典拠となった『瑞像歴記』を確認すると、「開元寺」の栴檀像は、鳩摩羅琰・羅什父子に関係する像であったことが知られる。しかし、作者の澄憲はその点に全く触れない。したがって、栴檀像の震旦将来譚としては、梁祖武帝の話が採用されているかのように見える。つまり、澄憲は、『瑞像歴記』を参照しているにもかかわらず、二説の位置づけをあたかも逆転させているかのような記述をし、『瑞像歴記』では否定されていた話を敢えて正統のものとして採用しているのである。

但し、『転法輪鈔』では、唐の武宗の時代に仏法が弾圧された際、「開元寺」が現状を維持できたのは瑞像の霊威によるものであると称讃する記述が続く。そして、渡航した東大寺僧奝然が「開元寺」の栴檀像について尋ね、遂に許可されて栴檀像を模刻し、本朝に将来したことが述べられている。これによって、清涼寺の釈迦像が「開元寺」由来のものであるという意識が澄憲にあったことが分かる。

ところで、『転法輪鈔』は、清涼寺釈迦像に対して、国王の帰依に相応するもの（「此尊像、国王御帰依機感尤相応」）としてその由来を語る。造仏や仏法伝来と関わりのある優塡王や波斯匿王、梁武帝や漢明帝の名が挙げられているのも、ここでは「国王」の故事という意識があったと思われる。そして、震旦への栴檀像将来とその後の流伝については、主に「国王」の帰依を軸に叙述する。震旦将来についての結語にも「天竺・辰旦帝皇帰依如此」とあるように、この栴檀像譚の記述は、天竺・震旦の「国王」による栴檀像への帰依について焦点を当てたものであった。この表白が法華八講に臨席する後白河院を意識したものであったと考えれば、典拠である『瑞像歴記』で否定された説を先に載せるという記述は、一見不可解であるが、栴檀像に「国王」が帰依した例について語るため、澄憲が選択した一つの方法であったのかもしれない。

同じく澄憲作である建久二年（一一九一）閏十二月の「嵯峨釈迦模像供養表白」（『転法輪鈔』）にも簡略にまとめられた栴檀像譚がある。

昔尺迦大師、於忉利天九旬説法之時、閻浮提内仏久不見御、空中如無月、人家如無主、十六大王面々奉恋暮、万億人民各々愁憂、爾時、優塡国王刻赤栴檀模尊容、波斯匿王瑩紫磨金彰聖像、彼栴檀像迎来漢土、爰我朝永延年中、東大寺有沙門其字号斎然、忽発願念宜給印灑凌万里波入大唐、雲攀天台清涼両山面踏聖跡、迎尺迦文殊二像、早帰我朝、…

この表白では、栴檀像の震旦将来の記事は傍線部のみで、将来の経緯そのものについては省略されている。

一方、『宝物集』清涼寺釈迦栴檀像譚の震旦将来部は、鳩摩羅琰が運んだ像であることから、『瑞像歴記』に併記される説のうち、「開元寺」の説が採用されていることが分かる。後世の栴檀像譚はこの系譜上にあるが、『転法輪鈔』の記述から知られるように、震旦将来譚としての説は無条件に確定したものではなかった。そのことは『宝物集』の校勘記事からもうかがえる。

ところで、『宝物集』には本来あるべき人物の名前が欠落している。すなわち、鳩摩羅琰の子、鳩摩羅什である。『瑞像歴記』の栴檀像譚では、鳩摩羅琰が天竺から亀茲国まで栴檀像を運び、亀茲国から震旦へは羅什とともに将来されたと記されている。その後、苻堅が呂光を遣わして亀茲国を破り、高僧と名高い鳩摩羅什を奪取したのであった。つまり、栴檀像が震旦へと将来されるには、羅什の存在が不可分のものだったのである。『転法輪鈔』の場合、震旦将来については梁祖武帝にまつわる大明寺説を採り、開元寺に安置される像の経緯については記していないので、当然ながら羅什の名は見られない。しかし、『宝物集』は、鳩摩羅琰が栴檀像を運んだことを記しながらも、その子羅什については記さなかったのである。

四　羅什伝

羅什の存在が欠落している『宝物集』の特異性を確認するために、他資料が有する栴檀譚を検討したい。

『今昔物語集』巻六第五話は、現存最古と見られる和文化した鳩摩羅琰・羅什父子の伝記であり、冒頭の忉利天説話に引き続き、栴檀像の震旦将来譚が語られる(9)。未だ仏法の伝わらない震旦の衆生のため、鳩摩羅琰は栴檀像を盗んで震旦に渡そうとするが、途中の亀茲国で引き留められて王の娘と結婚し、その死後に鳩摩羅什が生まれた。成長した羅什は亡父の「本意」を知り、その遺志を継いで栴檀像を震旦に渡そうとする。『今昔物語集』とほぼ同話と見なされる『打聞集』第八話では、その後、震旦に渡された栴檀像をさらに模刻した像が日本に将来されたことを末尾に記し、清涼寺釈迦如来像の由来へと話を繋げている。

…イハユル羅什三蔵也。如レ法唐ニ此仏ヲ渡付給テ、オホクノ衆生ヲ利益シ、法花経ヲ渡。コレノミナラズ、多ノ経論ヲカキイダシ、此ノ国マデ仏法ノ伝ル事モ、タヾ此三蔵ノトクナリ。サテ、此仏ヲバ、唐ニ渡タテマツレルヲ、又ウツシ造タテマツリテ、此国ニ渡シタテマツルナリ。清岸(ママ)寺ニイマニヲハスル仏也(10)。

しかし、『今昔物語集』では、日本へ栴檀像が伝えられたことまでは記されていない。「鳩摩羅炎奉盗仏伝震旦語」という題が示すように、本話の主題は、鳩摩羅琰・羅什父子によって栴檀像が震旦へと伝えられたことにあった(11)。

次に、『宝物集』清凉寺釈迦栴檀像譚とも関わりの深い和漢朗詠集注釈書（以下、朗詠注）を検討したい(12)。

『宝物集』以前の成立である『和漢朗詠集私注』・『和漢朗詠註抄』は、大江匡衡によって栴檀像譚を題材に詩句が作られた当時の話と、天竺で優塡王が造像した説話を載せているが、震旦将来譚については記さない。一方、『和漢朗詠集永済注』になると天竺から本朝までの将来の経緯が叙述されるようになる。天竺での造像説話が語られた後、『永済注』は、法師である鳩摩羅琰が、栴檀像を背負って震旦へと赴く途上で、亀茲国の白純王の「妹」と結婚して鳩摩羅什が生まれたこと、苻堅が将軍呂光を遣わし、鳩摩羅什ならびに瑞像を奪取したことを記す。

…其後、秦王符堅トイフ人、大将軍呂光ヲシテ、将兵十万ヲモテ亀茲ヲウチ、什公ナラヒニ瑞像ヲトル。凡、此像、亀茲ニアルコト六十余歳、西京呂光カ処ニイマスコト十四年、長安姚興ニイマスコト十七年、後ニ江南ウツサレタマフ。凡、四朝ニアルアヒタ一百七十三年ヲヘタリ。什公、長安ニキタルコト、生年七十六歳也〈已上瑞像記ニミヘタリ〉。

此像、ツヒニ漢土ノ宝物トシテ、裔然法橋、入唐ノトキ奉拝之。即、其像ヲウツシツクリテ、此朝ニワタス。今ノ嵯峨ノ尺迦、是也(13)。

二重傍線を施した部分は割注であるが、『永済注』は『瑞像歴記』を参照したことが示されている。採用されているのは「開元寺」の説であり、鳩摩羅什の存在が確認される。

国会図書館蔵『和漢朗詠集注』は、宮田寿栄氏が指摘するように、「弗舎蜜多」や「蒙遜王」という誤った名が見えること、また、裔然が夢告によって新しく造った像と栴檀像を取り替えて日本に持ち帰るとすることなど、『宝物集』と共通する点が多い資料である。

…如来御入滅ノ後チ、弗沙蜜多ト云悪王世ニ出テ、滅二仏法僧一時、栴檀ノ仏ヲ、奉ラシ失一トテ、鳩摩羅炎三蔵ト云人、奉レ負二木像尺迦一、唐土ヘ越トシ給シニ、其ノ道ニ、亀茲国ト云所ノ蒙遜王、奉留二三蔵一、不叶一間、奉三合二姫宮一。（大唐ノ僧詳ノ法花伝ニハ、王三昧ト云ヘリ。此義吉歟）。御子鳩摩羅什三蔵ヲ儲ケ給。

羅什三蔵、又、此仏ヲ父モ唐土ヘ志シ給シカハトテ、唐ヘ度奉ル。唐土ニハ、秦王ノ崇之。又、聖ノ種ヲツカントテ、秦大王亦、奉レ合二姫宮一。サテコソ、生、肇、叡ノ四人ノ御子ヲ儲ケ給ヘリ。（此事、謬ノ説カ。唐ノ法花伝ニ有之。）

其後、日本一条ノ院ノ御宇、永延年中ニ、東大寺ノ裔然聖人入唐求法ノ時キ、依夢相告一、新造ノ仏ニ奉二盗替一、奉二安置一。今ノ嵯峨ノ尺迦如来也(14)。…

この国会図書館蔵本は、『宝物集』が最初目にした資料の存在

を思わせるものであるが、『宝物集』と異なるのは、やはり羅什の存在が大きいことである。さらに、国会図書館蔵本は、羅什が「秦王」の姫君との間に四人の子を儲けたという異伝を載せる。

以上、検討してきたように、栴檀像震旦将来譚を有する資料には、羅什の存在が不可欠な要素として扱われるのが通例である(15)。それに対して、『宝物集』に羅什の存在が欠落していることは明瞭であろう。

ところで、中世において鳩摩羅琰・羅什父子の説話は多くの資料に収載されたが、栴檀像譚の他にあらわれる主題として、父子が婚姻したことが挙げられる。その一つ『沙石集』は、「上人子持事」について語る中で、その先蹤として鳩摩羅琰および羅什が子をなしたことを挙げている。『沙石集』は作者無住自身が何度も校訂を加えたことが知られ、多くの伝本が存在するが、その伝本の一部には、栴檀像譚も併せて記すものもある。例えばその一つ、阿岸文庫本などは、「仏舎密多羅」や亀茲国の「蒙遜王」など、『宝物集』と共通する名前が見られる伝本である。『沙石集』においては、鳩摩羅琰と羅什伝に付随して栴檀像譚が語られているわけで、当然ながら羅什の存在は不可欠なものとなっている。

『沙石集』では、羅什が生・肇・融・叡の四人の子を持ったとする。これは先の国会図書館本朗詠注にも見られる伝であるが、唐の僧詳『法花伝記』を参照せよとするように、実際は実子ではないことは『沙石集』にも一説として示されるところである。いずれにせよ、『沙石集』は、聖の破戒という問題についての譬喩として鳩摩羅琰・羅什父子の伝説を利用したのであった。

それでは、『宝物集』が羅什の名前を載せないのは、どのような理由があったのだろうか。一つには、『宝物集』の栴檀像譚が運んだ人物よりも栴檀像そのものの動きを重視し、本来は羅什伝に付随していた栴檀像の話を栴檀像を主体としたことによって、羅什の存在が消えてしまったということが考えられる。しかし、そうであったとしても、『宝物集』が典拠とした栴檀像譚の資料に、羅什に関する記述がなかったという可能性は低いと思われる。というのは、『宝物集』には、「十二門開示」の中の第三「持戒」で、鳩摩羅琰・羅什父子の話が例証として載せられているのである。

一角仙人は玉女容にちかづきて験をうしなひ、四目居士は臣子の命にしたがひて行をおこたる。鳩摩羅衍は、亀茲国の玉女に縁をむすび、羅什三蔵は四人の君をまうけき。大樹仙人は女をみて定をいで、かさん比丘は、優婆崛多にはかられて、憍尸迦梵志が不還果を証せし、女人をすつる事なし。初果聖者の法を信ぜし、昼夜に八十度婬をおこなひき。

…鳩摩羅衍は天竺の大臣なり。仏法をおもくして、天竺をすてて亀茲国へうつり給ひしほどに、遜遜王の御妹におしあはせられて、羅什三蔵をまうけ給ふ事也。羅什三蔵はたゞ人にあらず、一日に八十丁の正教をおぼゆ。法華経翻訳する人なり。しかりといへども、四人の子をまうけて、各公と云名をつくる事なり。　（第二種七巻本『宝物集』巻五）(16)

『宝物集』は例証として項目を列挙した後、それぞれの項目について詳しく注釈する。ここでは、仏法を重んじて亀茲国へ移った鳩摩羅琰が「遼遜王」の妹と結婚させられ、その子羅什もまた、法華経を翻訳した程の人物でありながら四人の子を儲けたとする。破戒の行為をしてもなお聖の性質を保つことを述べる『沙石集』と比べれば、『宝物集』の羅什父子に対する視線は容赦がなく、二人の例は「聖」ですら女犯を免れなかった証として述べられているのである。

「蒙遜王」の名が栴檀像譚に見られる誤りであることからすれば、この箇所の『宝物集』の典拠となった話は栴檀像譚を伴っていたと考えられる。したがって、前に見た『宝物集』の栴檀像譚には羅什の存在が欠落しているが、その依拠資料には羅什の名があった可能性が高い。『宝物集』は、栴檀像譚から鳩摩羅什の話を切り離し、「持戒」の例証話として置いたのではないだろうか。

おわりに

平安末期から中世にかけては、釈迦信仰が大きく見直された時期であった。その中でも清涼寺釈迦像は、特に生前の釈迦の影像であるとして格別の崇敬を集めた。この流れは、清涼寺釈迦像の由来を改めて辿り、その縁起によってさらに像の尊性を称揚しようとする営みにつながった。釈迦像と同時に将来された『瑞像歴記』は、縁起の源泉とされて然るべきものであったが、『転法輪鈔』所収の澄憲作表白に見られるように、その縁起記事の選択には未だ揺れがあったことが知られる。『宝物集』は、異説を記した文献の存在を認めつつも、天竺から本朝まで三国にわたってひとすじにつながる縁起譚を持ち得た。清涼寺の釈迦像が栴檀像そのものであるとする『宝物集』の言説は、後世の清涼寺の縁起に大きな影響を与えることになる。

注1　『塚本善隆著作集』第七巻、浄土宗史・美術篇（大東出版社、一九七五年）、京都国立博物館編『釈迦信仰と清涼寺』（特別展目録、一九八一年）など参照。現在は美術史の方面からも多くの研究がある。

2　宮田寿栄「説話の流伝―清涼寺釈迦像縁起譚をめぐって―」（『仏教文学』一〇、一九八六年三月）、中島秀典「『宝物集』における嵯峨清涼寺釈迦像縁起譚の考察―その本仏説をめぐって―」（『緑岡詞林』一〇、一九八六年四月）。

3　引用は新日本古典文学大系（岩波書店）による。底本は第二種七巻本系吉川泰雄氏蔵本。

4　『宝物集』の注釈方法については、大島薫「宝物集の生成―享受をめぐる改変の様相」（『中世文学』四〇、一九九五年六月）に詳しい。

5　注2前掲論文。

6　平林盛得「〈資料紹介〉優塡王所造栴檀釈迦瑞像歴記―附　西郊清涼寺瑞像流記―」（『書陵部紀要』二五、一九七四年三月）参照。底本は宮内庁書陵部蔵旧九条家本、鎌倉期写。『瑞像歴記』は、①後周顕徴五年（九五八）金陵長先寺徒南述「栴檀釈迦文像略讃」と、②後唐長興三年（九三二）江都開元寺十明述「優塡王所造栴檀釈迦瑞像歴記」の二部から成る。

7　注2前掲論文。この説話は、『三宝感応要略録』巻上「第四梁

祖武帝請釈迦瑞像感応」、『法苑珠林』巻十四にほぼ同内容が見える。

8 『安居院唱導集』上巻、角川書店、一九七二年。

9 鳩摩羅琰・羅什伝に関しては、本田義憲「和文クマーラヤーナ・クマーラジーヴァ物語の研究」（奈良女子大学文学会『研究年報』Ⅵ、一九六二年三月）に夙に詳しい。また、稲本泰生「優塡王像東伝考—中国初頭期を中心に—」（『東方学報』六九、一九九七年三月）は、彫刻史の方面から、中国への栴檀像将来について豊富な資料をもとに詳細に検討されている。

10 引用は東辻保和『打聞集の研究と総索引』（清文堂出版、一九八一年）による。

11 荒木浩「聖徳太子伝から国史へ—今昔物語集本朝部の構想をめぐって」（『説話論集』第七集、清文堂、一九九七年）参照。

12 朗詠注と清涼寺栴檀像譚との関わりについては、拙稿「朗詠注と太子伝における「仏法最初の釈迦像」譚」（『待兼山論叢　文学篇』三七、二〇〇三年十二月）において考察した。

13 伊藤正義・黒田彰編『和漢朗詠集古注釈集成』第三巻、大学堂書店、一九八九年。

14 伊藤正義・黒田彰・三木雅博編『和漢朗詠集古注釈集成』第一巻、大学堂書店、一九九七年。

15 鳩摩羅什の伝記において栴檀像譚が結びつく例は、室町時代に成立したと考えられる『羅什絵伝』からもうかがえる。『羅什絵伝』は、父鳩摩羅琰が天竺から栴檀像を運ぶところから始まり、鳩摩羅琰が仏像を背負っている場面が絵画化されている。

16 片仮名古活字三巻本もほぼ同文。